

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 <sup>みすみ</sup>三角 <sup>よういち</sup>洋一

本論文は『源氏物語』宇治十帖について、その世界形成に仏教がいかに深く関わっているかという視点を中心に据えて考究したものである。構成は5部23章からなっている。

第Ⅰ部「源氏物語と仏教」は、本論文全体の基礎となる考察であり、この物語が書かれた当時の、作者と読者とが共有し得た仏教教学の水準と位相を具体的に解明している。その際、公卿日記や仏教説話、釈教歌、今様法文歌などが博く参照されているのはもとより、著者の方法の特徴をなしているのは、『河海抄』等の中世源氏学を手がかりにしつつ、天台六十巻や『往生要集』等の論疏類を出典調査と経文解釈の根幹に据えていることである。また中世源氏学の基盤となっている文芸思潮全般にも幅広く目配りしている。

第Ⅱ部以下では、第Ⅰ部で提示された方法と知見を生かしながら、宇治十帖を精緻に読み解いてゆく。第Ⅱ部「匂兵部卿巻をめぐって」は、道心を抱きながら出家することができない主人公薫の物語と深く交錯するかたちで『維摩経』の引用があることを指摘し、薫の体に備わる生得の芳香も『維摩経』香積仏品・菩薩行品の香、ことに菩薩行品の「一切諸の煩惱の毒を滅除して然して後に乃ち消」えるという香と関わらせて解すべきであるという、この物語全体の主題とも関わるようなきわめて重要な問題を提起している。

第Ⅲ部「宇治の姫君たちをめぐって」では、まず宇治の大君・中の君姉妹の父八の宮の優婆塞すなわち在家出家者としての生き方がやはり『維摩経』と関わらせて論じられ、ついで薫が、この八の宮に師事して仏道を習いながら宮の大君に心惹かれていよいよ出家から遠ざかってゆくさまが、物語が書かれた当時現実に相継いで起こっていた貴族青年の出家の事例とも対比させながら分析される。そして大君の死の前後の描写に生老病死の仏教的表現を析出しつつ、その死は『法華経』に説かれる釈尊の入涅槃相と同じように薫の発心を深めると同時に、中の君に対する後見の責務という絆によっていよいよ自縄自縛的に迷妄を深めてゆく因縁ともなっていると指摘する。

第Ⅳ部「蜻蛉巻の後半部分をめぐって」は、大君を失って以後その妹の中の君に、またその異母妹の浮舟にと、いよいよ愛執と迷妄を深めてきた薫が、明石の中宮方の侍女たちを観察し、そのさまざまな境遇に思いめぐらすことを通して、ようやく自身と宇治の三姉妹との関係を客観的に見据え直すことができるようになってきたことを指摘する。そして第Ⅴ部「手習・夢浮橋巻をめぐって」では、浮舟出家の過程の描写を、釈尊の出家成道を描いた仏典『過去現在因果経』と対比しながら意味づけるとともに、従来さまざまな議論がなされてきた薫と浮舟の行く末について、物語は浮舟が薫の庇護のもとで仏道修行を続けてゆく将来を暗示しているという論をきわめて説得的に展開している。

仏典との関連を指摘した箇所にはやや円鑿方柄の憾みをなしとしない所も見られるが、それは上述のような本論文の研究成果の意義を減殺するものではない。よって審査委員会は本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。